

Next is us

日体魂を受け継ぐ者

2020年に向けて、
日体大から世界のすべての人々へ
スポーツの魅力と平和への願いをつないでいく。

Special Contents

03

健康・スポーツを支える最前線

～ケガの応急手当から競技復帰、再発防止をトータルサポート～
日本体育大学

スポーツキアセンター

横浜・健志台接骨院

05

～アスリートはもちろん、地域の方々の健康・命を支える新拠点～

日本体育大学クリニック

平成30年12月開院

07

スポーツ救急をひもとく

②マラソン大会における救護対応システム

鈴木 健介 保健医療学部 救急医療学科 准教授

原田 諭 保健医療学部 救急医療学科 救急救命専門指導教員

小倉 勝弘 保健医療学部 救急医療学科 救急救命専門指導教員

11

活躍するOB・OG

人と同じ道は歩まない。プロを目指してドイツへサッカー留学。
いまは地域のために、子どもたちのために全力を傾ける。

伊藤 佑介 氏

NPO法人 SV Norderstadt 理事長

ラウンジの顔。ホテルの仕事を極め、2020年、
海外からのお客様に最高のおもてなしを提供したい。

中村 恵 氏

ヒルトン東京 マーブルラウンジ レセプション

15

Next is us 日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

第7回 桜のジャージを誇りに、輝くために前へ、前へ進む。

大竹 風美子 選手(ラグビー)

17

教員志望の日体大生を力強くサポート

教職支援センターを知る、活かす、夢に近づく

Report⑤ 教員を志す者が集い、切磋琢磨する「日体教学舎」

19

news & topics

平成30年度 第4回留学生交流会(日体ファミリー)を開催しました

「日本体育大学クリニック開院式」が執り行われました

北京体育大学建学65周年式典に副学長が出席いたしました

インドネシア2018アジアパラ競技大会に本学関係者が参加



「動」

▷平成最後の年が始まった。皆さんはこの時代の節目にどのような目標を立てているだろうか。この30年の間に、スマートフォンが必需品となり、情報が国境を越えて飛び交い、時代の動きは飛躍的に加速している。

▷これからの時代は、技術の進化を享受しつつ、さらにそれによって山積する諸問題の解決に挑んでいく時代となるであろう。時代はいかに変わろうとも中心にあるのは「人」である。健康のため、多様な人々との共生のため、本学やOB・OGが地域と連携し、力を注いでいる。

▷一人ひとりの一歩は小さいかもしれないが、仲間と、同窓生と、日体ファミリーと、歩みを合わせることによって大きな動きとなる。10年後、20年後、現在と断絶的に変化するであろう新時代に、中核として世の中を動かすのは皆さんである。今こそ、勇気をもって、一歩を踏み出していきたい。高みを目指す情熱に満ち溢れた日体生には「動」の文字がふさわしい。

学報NITTAIDAI(ニッタイダイ) 55号

発行日●2019年2月5日

発行●日本体育大学広報課

TEL 03-5706-0948

FAX 03-5706-0922

http://www.nittai.ac.jp/

制作協力●(株)図書出版

平成の時代の目覚ましい社会や技術の変化を受け止め、日体大は着実に進化を遂げてきた。

進化のキーワードの一つは「教育・研究領域の広がり・深化」である。スポーツへの多様な期待に応えて、「身体に纏わる文化と科学の総合大学」を標榜し、改革に取り組んできた。平成25年に児童スポーツ教育学部（児童スポーツ教育学科）、平成26年に保健医療学部（整復医療学科・救急医療学科）、平成29年にはスポーツ文化学部（武道教育学科・スポーツ国際学科）、平成30年にはスポーツマネジメント学部（スポーツマネジメント学科・スポーツライフマネジメント学科）を開設した。大学院においては、平成10年に体育科学研究科博士（前期・後期）課程を開設。さらに、平成23年に博士前期課程に「体育実践学コース」「体育科学コース」、平成29年に教育学研究科実践教科教育学専攻博士（前期・後期）課程、平成30年には体育科学研究科コーチング学専攻博士（前期・後期）課程、保健医療学研究科保健医療学専攻修士課程を設置し、研究体制の充実を図っている。

二つ目は「教育環境の整備」である。平成19年に着工された東京・世田谷キャンパス再開発工事は、平成24年に第3期工事の竣工をもって完成をみた。様変わりしたキャンパスを驚きの目で眺めた諸先輩も多いだろう。このほか競技施設の整備が進められていった。

「つながり」も平成を象徴するキーワードだ。諸外国の大学・教育機関・スポーツ団体との交流協定の締結、国内の地方自治体との連携協定や社会貢献も積極的に推進してきた。JICAボランティア等をはじめ、国際交流、国際平和・貢献活動に多くの学生が取り組むようになった。

そして、言うまでもなく2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた「競技力強化」である。平成10年に開設された「スポーツ局」、平成27年に本格始動したNASS（日体大アスリートサポートシステム）の実績のもと、平成29年に革新的な体制である「日本体育大学アスレティックデパートメント」が発足。2020年の「本学学生及び卒業生を合わせた70名のオリンピック・パラリンピアン輩出」を目指す。

日体ファミリーが一つになって、新しい時代を切り開いていかなければならない。



「開かれた大学」を象徴する東京・世田谷キャンパス



日体大と平成



パラアスリートの育成も進んだ

「ケガの応急手当から競技復帰、再発防止をトータルサポート」

日本体育大学 スポーツキュアセンター 横浜・健志台接骨院

平成27年10月の開院以来、日体大のアスリートや地域の人々の競技活動や日常生活を支えてきた「日本体育大学 スポーツキュアセンター 横浜・健志台接骨院」。接骨院や整形外科での臨床経験豊富なスタッフによる施術と、最新の機器を備えた環境により、質の高い治療・サポートを提供しています。また、子どもや中高齢者を対象とした健康・スポーツ啓発イベントを開催するなど、地域貢献も積極的に推進しています。



地域の皆様、日体大のアスリートの 身近な存在であり続けるために



伊藤 譲 教授

日本体育大学 スポーツキュアセンター横浜・健志台接骨院 院長
日本体育大学保健医療学部整復医療学科 学科長
大阪医科大学大学院医学研究科 修了・博士(医学)
柔道整復師、はり師、きゅう師、
日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー

Q1 スポーツキュアセンターの特色、 アピールポイントはなんですか？

「キュア」の愛称で親しまれているスポーツキュアセンターは平成27年10月27日に、保健医療学部附属臨床実習施設として開院しました。整復医療学科の臨床実習の場として誕生し、横浜・健志台キャンパスの中心部にあることから患者さんの約9割が日体大生です。柔道整復師の資格を取得して、将来、スポーツに医療の立場から貢献したいと考える学生にとっては他の養成施設とは一線を画する臨床実習施設と言えます。一方、学友会等で様々なスポーツに取り組む日体大生にとっては、身近にあっても治療が受けられる施設であり、安心して全力でスポーツに取り組むことが出来ます。超音波観察装置などの評価機器、最新の治療機器を備えているのももちろん、スポーツ復帰のためのトレーニングスペース・機器も備え、競技特性を考慮したトレーニング指導やケガの再発予防のトレーニング指導を行っています。すなわち、スポーツキュアセンターは、ケガの応急手当から競技復帰、再発予防のトータルサポートを提供していることがアピールポイントです。そして、アスリートの治療で得たノウハウを一般の患者さんに還元し、現在では健康寿命の延長に取り組む活動を行っています。

Q2 利用状況や患者さんの 反応はいかがですか？

開院して約2年半の平成30年5月までに、スポーツキュアセンターを利用していただいた患者さんは2,500名を超え、まもなく3,000名に達します。このように多くの患者さん来院していただけた背景には、日々の診療、運営に携わっているスタッフの日々の努力と工夫があります。臨床実習とは別に、整復医療学科の学生のうち、試験で選抜された学生は、アルバイト研修生として業務の補助を行っています。このような学生を含め、毎週欠かさず勉強会を行っています。もちろん、スタッフミーティングや注意を要する患者さんの状態等について、全スタッフが情報共有するためのカンファレンスも毎週欠かさず行っています。このような意識の高いスタッフが医療を提供していることで、その評価はとて高く、一度受診した患者さんは、また負傷した際にそのほとんどが、再度キュアセンターを受診していただいています。

Q3 今後の抱負や地域・患者様への メッセージをお願いします。

スポーツキュアセンターでは、開院当初に3つのミッションを掲げました。①スポーツ競技の発展に柔道整復で貢献します。②地域の人々の健康に寄与します。③日体大ファミリーに貢献します。この3つです。まず①について、日本の伝統医療である柔道整復は、その成り立ちからスポーツとの関係は強く、スポーツ外傷の治療を得意としています。科学的根拠に基づく治療をさらに推進するため、スタッフは毎年、関連学会で徒手検査や各種治療法等の治療効果についての研究発表を行っています。②については、健康運動教室を展開しており、平成28年度と29年度は地域の中高齢者を対象として年2回健康運動教室(膝痛さようなら体操)等を開催し、平成30年度は小学生低学年を対象として年9回(めざせ！トップアスリート)開催しました。2019年度は、「めざせ！トップアスリート」を継続して開催し、さらに中高齢者向けの「膝痛さようなら体操」と「腰痛さようなら体操」を実施予定です。この取り組みは、実は、松浪健四郎理事長がとある講演の中で述べられた「子どもに夢を、高齢者に健康を」の言葉を受けて具現化しました。このようなイベントを実施することで、スタッフも成長しています。スポーツキュアセンターは、今後も地域の皆様に、日体大の皆様に愛される接骨院になるために努力を惜しまず、成長し続けたいと願っております。ご利用いただき、その感想、ご意見をいただきましたら幸いです。



【概要】日本体育大学 スポーツケアセンター横浜・健志台接骨院

スポーツキ

日本体育大学 スポーツケアセンター横浜・健志台接骨院とは

スポーツによるケガや関節、筋の痛みの治療を専門とするスタッフが治療に当たります。また、最新の評価・治療機器、運動療法機器を備えており、ケガの応急手当からスポーツや日常生活への復帰、再発防止までトータルサポートを提供いたします。スポーツ・健康をサポートする新拠点として、誰でも利用できます。ケガの痛み、ケガの予防でお困りの際は是非当院を活用してください。



こんなときは…

- ・転倒して手首を痛めた。
- ・ボールが当たり、打撲した。
- ・短距離走で肉ばなれした。
- ・重たい物を持ち上げて、腰を痛めた。
- ・競技中、タックルをされて膝を痛めた。
- ・交通事故による痛み など

受けることができる治療・サポート

<保険適用>

保険適応の疾患は、原因がはっきりとした概ね1週間以内のケガです。保険適応の可否については来院された際にお尋ねください。保険適応時の自己負担額(窓口で払う金額)は、初回約1,500円(初診料含む)、2回目以降約500円です。

※自己負担額は治療部位数、回数により異なります。



・骨折・脱臼

超音波観察装置を用いて判断し、整復(骨を元の位置に戻す)。患者さんのニーズに合わせた病院を紹介します。



・打撲・捻挫

ケガの程度を確認し、適切な対応を行います。重度のものは固定を行います。



・挫傷(肉ばなれ)

筋肉の損傷度を確認し、治療を行います。再発防止のためのリハビリテーションを行います。

・事故・労災

仕事上のケガや通勤中のケガ、交通事故や労働災害の場合は、自賠責保険や任意保険適応可能です。

<自費治療>

- ・高周波 ￥600 (保険治療に追加の場合は ￥200-)
- ・電気治療 各￥500 (低周波、中周波、干渉波、超音波)
- ・テーピングのみ 1部位につき￥200～(部位によって異なります。)

※料金(保険、自費)の詳細はスタッフにお尋ねください。

<パーソナルトレーニング指導>

自分自身のカラダを評価するための評価機器も充実し、一人ひとりにあったトレーニングプログラムを提供します(要電話予約)。



	初回料金(90分間)	2回目以降(60分)
学 生	¥2,000	¥500
一 般	¥5,000	¥1,000

公開講座

<さようなら体操>

地域の方や、スポーツを行っている方、痛み悩んでいる方を対象に、痛みの改善を目的としたご自宅でもできる体操を行います。



<めざせ!トップアスリート>

キッズからできるケガの予防・トレーニング・栄養管理を学び、将来のオリンピック選手やプロスポーツ選手を目指すキッズをサポートします。



利用案内

最新情報はホームページを参照してください。

<https://www.facebook.com/nssu.scc/>



曜日	月	火	水	木	金	土・日・祝
受付						
9:00 ～ 20:30	○	○	○	○	○	10:00 ～ 16:00

※急患は早朝・深夜を除き随時受付します。

※大学行事日、祝日の診療については問い合わせください。

- ・場 所／ 横浜・健志台キャンパス3号館1階
- ・問い合わせ／ 日本体育大学
スポーツケアセンター横浜・健志台接骨院
Mail: info-scc@nittai.ac.jp
電話: 045-479-6262 FAX: 045-479-5353

学クリニック



「アスリートはもちろん、地域の方々の健康・命を支える新拠点」

日本体育大学クリニック

平成30年12月、日本体育大学クリニックが開院しました。スポーツ選手の怪我の治療、予防・アドバイスはもちろん、本学学生・関係者をはじめ地域住民の方々も対象に、スポーツに起因しない怪我や病気の診断・治療も行います。さらに将来は、スポーツ選手の外傷、障害データを蓄積し分析していくことで、外傷、障害の原因(危険因子)を発見し怪我の予防につなげていくことも目指します。ぜひご利用ください。

最新の設備、経験豊富な専門医の診療で、安心して利用頂けます

Q1 日体大クリニックの設立の背景やねらいはなんでしょうか？

日体大クリニックは、学生のメディカルサポートを目的として開設されました。学生が安心して部活動が出来るように、又授業を休まずに受診できるように夕方の時間帯に診療を行っております。整形外科、外科では部活動中の怪我の対応ができますし、内科では病気の診断・治療のほか4月の定期健康診断後の2次検診にも対応致します。当クリニックは最新の医療機器を導入しており、各診療科の専門医(本学教員)が、親切丁寧に診療を行っておりますので、安心して御利用ください。

Q2 日体大クリニックの特徴や今後の構想などについてご紹介ください。

当クリニックは、経験豊富なスポーツドクターが診療を行っております。整形外科では、スポーツ外傷・障害の診断・治療および再発予防のアドバイスを受けることが出来ます。内科では、心肺機能の精査(負荷心電図等)を行うことができ、突然死の予防に努めます。またトップアスリートが日常注意



平沼 憲治 教授

日本体育大学クリニック院長
日本体育大学保健医療学部 学部長
産業医科大学医学部卒業・博士(医学)
日本スポーツ協会公認スポーツドクター、日本整形外科学会認定スポーツ医、日本整形外科学会整形外科専門医

しなければいけないドーピングについて熟知しているスタッフが揃っている点も安心です。将来的には、地域住民を対象にスポーツドック(健診)も行いたいと考えています。

Q3 日体大クリニックのアピールやメッセージをお願いします。

当クリニックは、保険診療を行っております。学生・教職員・地域住民の皆様にご利用して頂きたいと願っております。スポーツによる怪我・疾患以外の一般診療も行っております。各種予防接種、健康診断、骨密度検査も行っておりますのでご利用ください。学生・教職員・地域住民の皆様から信頼され、愛されるクリニックを目指し、スタッフ全員力を合わせて努力してまいりますので、御理解御協力頂きたくよろしくお願い申し上げます。



日本体育大



【概要】日本体育大学クリニック

本学学生・教職員、地域住民の方々をはじめ、どなたでもご利用いただけます。スポーツに起因しない怪我や病気も受診できます。

<診療科・診療時間>

曜日	月	火	水	木	金	土・日・祝
診療科	整形外科	内科・外科	第1・3・5週 整形外科 第2・4週 内科・外科	内科・外科	整形外科	休診日
診療科	16:00~19:00 (受付開始15:30)					

※上記休診日の他、以下の休業があります。
夏季休業(8月中に1週間) 開学記念日休業(9/20) 冬季休業(12/28~1/5)
その他本学の諸行事等に伴う臨時休業

<診療案内>

整形外科(一般整形外科, スポーツ整形外科)
内科(一般内科, 循環器内科, スポーツ内科)
外科(一般外科)

<ご利用いただく皆様へ>

- ・お会計(支払い)は現金のみのお取り扱いとなります。
- ・予防接種・抗体価検査/内科診療日で取り扱います。(予約制)
- ・駐車場/大学構内の駐車場はご利用いただけません。(公共交通機関をご利用ください)

<利用案内>

最新情報はホームページを参照してください。
<https://www.nittai.ac.jp/about/facility/scc-nssuc/clinic.html>

- ・場 所/ 東京・世田谷キャンパス教育研究棟1街区G階
- ・問い合わせ/ 日本体育大学クリニック
電話:03-5706-0929 FAX:03-5706-0938



医師紹介

スポーツ障害・スポーツ外傷のスペシャリスト



清水 勇樹先生

○診療にあたり、特に力を入れたいことや心がけたいこと

スポーツ整形外科医として培ってきた技術と知識、そしてスポーツ現場での経験を活かして、多岐にわたる選手や患者さんのニーズに応えられるように、薬だけに頼らず、医学的エビデンスに基づいて、確かな診断、確かな適応、確かな治療を目指します。最近では超音波画像診断装置を使用して診断と治療を行っています。

○受診や利用にあたって留意してほしいこと

根性論の時代は終わったことに早く気付くこと。またインターネットなど情報過多の時代なので、何が正しく何が正しくないかを見極めることです。何事も早期発見早期治療が大事。怪我の治療やケアなどで分からない事があったら、こじらせる前に早めに受診してください。その方が、逆に治療まで時間がかからないことが多いです。

○メッセージ

最新の機器も駆使しながら、「確かな診断、確かな適応、確かな治療」を行い、一人一人の多種多様なニーズに合うベストな治療方針を選択し、早期復帰へ向けて、全力で復帰までサポートいたします。

清水 勇樹(しみず ゆうき)整形外科
日本体育大学 保健医療学部 整復医療学科 准教授
産業医科大学大学院医学研究科障害機構専攻博士課程
博士(医学)/日本整形外科学会専門医/日本スポーツ協会公認スポーツドクター/日本整形外科学会認定スポーツ医/産業医科大学産産医学基本講座修了認定
おもな経歴: 産業医科大学若松病院 整形外科 助教/AR-Ex尾山台整形外科/ユニバーシアード2009 サッカー男子代表 チームドクター/全日本大学サッカー連盟 医事委員/横浜Fマリノス チームドクター

nittaidai55 ● 6

外科救急から生活習慣病の運動処方まで幅広く対応



遠藤 直哉先生

○診療にあたり、特に力を入れたいことや心がけたいこと

内科診療では循環器疾患の専門的診療やスポーツ医学的な診療に力を入れ、アスリートがドーピングコントロールに関して困ることなく診療や処方を受けられるようにしたいと思っています。また、学生の健康診断における二次検診について対応することで、授業や部活への影響を最小限にとどめられるようにしたいと思っています。

○受診や利用にあたって留意してほしいこと

内科として診療していますが、元々は外科専門医で心臓血管外科を専門としており、外科救急で長く定期的に診療もしていましたので、緊急事態に関しては幅広く対応可能です。受診するべきか迷ったら一度クリニックに問い合わせをしてみてください。

○メッセージ

通常の内科診療や、けがなどの一般外科診療はもちろんのこと、循環器疾患の専門的診療やスポーツ医学的な診療にも対応いたします。スポーツ医学診療は、トップアスリートだけでなく、一般向けの生活習慣病への運動処方まで幅広く行いますので、お気軽に受診してください。

遠藤 直哉(えんどう なおや)内科・外科
日本体育大学 保健医療学部 救急医療学科 准教授
日本医科大学 医学部 医学科/早稲田大学 スポーツ科学研究科 博士後期課程
博士(スポーツ科学)/日本外科学会専門医/日本スポーツ協会公認スポーツドクター
おもな職歴: 日本医科大学武蔵小杉病院 心臓血管・呼吸器・乳腺内分泌外科 助教/国立スポーツ科学センター スポーツクリニック/日本オリンピック委員会 医科学専門部会部員/日本水泳連盟 医事医員

第2回

マラソン大会における 救護対応システム

今号ではマラソン等の長距離走におけるスポーツ救急について紹介します。

日体大が第一回から協力してきた青葉区民マラソンにおける救護対応システムについて、さらにマラソン大会においてスポーツ救急がどうあるべきか、そしてマラソン大会などを開催する際の留意点などを、事例や現場経験などを踏まえて、3人の専門家の先生に解説していただきます。



メッセージ

マラソン大会は多くの人々が参加するため、心肺停止、低体温症、転倒などによるケガとスポーツ救急が必要な事態が起こることが予測されます。もちろん、ランナーが参加前から十分準備していれば何も起こらない可能性もあります。しかし、何もしていない場合、もし何か起きた場合、後手後手の対応になり最悪の場合、助かる命も救えなくなることも考えられます。そういう悲劇を起こさないためにも、スポーツ救急ではしっかりした準備、予測が必要です。さらに、心肺蘇生法などのスポーツ救急での初動は専門家だけができればいいというものではありません。多くの人々がスポーツ救急のことを知り、もしもに備える知識が当たり前のことになることを心から願っています。



【プロフィール】

小倉 勝弘 (おぐら かつひろ)

日本体育大学 保健医療学部 救急医療学科
救急救命専門指導教員
1978年、埼玉県生まれ。救急救命士・防災士。気管挿管・薬剤投与・処置拡大2項目認定救命士。大手通信企業での勤務経験も有し、川口市消防局で消防隊員、救急隊員、救急隊管理業務を経て2018年4月より現職。



【プロフィール】

ナビゲーター

鈴木 健介 (すずき けんすけ)

日本体育大学 保健医療学部 救急医療学科 准教授
1984年、東京都生まれ。日本医科大学博士課程修了。救急救命士・博士(医学)。2015年に日本体育大学保健医療学部助教、2018年に准教授に就任し、現在に至る。現在も日本医科大学多摩永山病院 救急救命センターで救急救命士として命をつなぐ現場に従事する。



【プロフィール】

原田 諭 (はらだ さとし)

日本体育大学 保健医療学部 救急医療学科
救急救命専門指導教員
1976年、山口県生まれ。救急救命士・防災士。指導救命士、気管挿管・薬剤投与・処置拡大2項目認定救命士。山口市消防本部で勤務し、消防大学校での各種専門研修、山口県消防学校の教官を経て2018年4月より現職。

第5回青葉区民マラソンでの スポーツ救急への準備と報告



鈴木 日体大の救急医療学科が開設された年に、青葉区民マラソン大会がスタートしました。日体大は以前からキャンパスがある横浜市青葉区と連携して、さまざまな活動を通じて経験と実績がありました。そんなこともあり、青葉区からマラソン大会の救護体制をつくるサポートをしてほしいとの依頼で第1回目から参加することになりました。マラソン大会を行うにしても、救護体制がしっかりしていないと、大会の安心安全が担保できません。そういう意味でもお互いにいいタイミングだったと思います。第1回は学科ができたばかりでマンパワーが限られていて、機材も少ない状況でした。そのため少しずつノウハウを蓄積し、機材も増え5回を迎えました。

原田 スポーツ救急では私たちが前面に出て活躍するというのは、緊急事態が起きたことを意味するので、あまりいいことではありません。ただし、しっかりした準備は絶対必要で、準備ができていからこそ、ランナーは安心して参加できるのです。

鈴木 今回の第5回は日体大で購入した救急車をはじめで出勤させました。救急車はランナーの一番後ろを走り、緊急事態に備えました。また、ICT（※1）を使いマラソンコース上で待機し、救護が必要な人が発生した場合、すぐに駆けつけ処置を行うBLS（※2）隊と、AEDを

持つて自転車に乗りランナーと並走するモバイルAED隊を沿道に配置し、さらに彼らがどこにいるのかをGoogle mapの位置情報を使い本部で共有できるようにしました。また子ども

見守りアプリを活用し、現場の状況を映像で伝送するしくみも作りました。これにより緊急事態が起きた場合、どこで起きたかの場所の特定、誰が一番近くにいて最短で到着できるか、そして現場がどのような状態なのか、短時間で正確に把握できるようになりました。スポーツ救急ではできるだけ早く対応できるかが、そして、その人の命が助かるか、また助かった場合に後遺症が残らないかがカギとなります。そういう意味では今回は現時点では万全の体制で臨めたと自負しています。

小倉 大学は教育機関でもありますので、青葉マラソンへの協力は学生教育の一環であり、実習の場でもあります。その点では学生が積極的に関わり、そして自主的に行動してくれたのは大きな成果といえるでしょう。幸いにして大きな事故は起きませんでした。現場に立つて行動したこと、次にもしものことがあったとき、今回のように行動できることが期待できます。スポーツ救急を現場で実施できる人材を養成することも、私たちの使命なのです。



（※1）ICT／情報通信技術。PCだけでなくスマートフォンやスマートスピーカーなど、さまざまな形状のコンピュータを使った情報処理や通信技術の総称。
（※2）BLS／一次救命処置。呼吸が止まり、心臓も動いていないと見られる人の救命へのチャンスを維持するため、特殊な器具や医薬品を用いずに行う救命処置。

第5回 青葉区民マラソン

- 開催日：平成30年11月25日（日）
- 申込者数：973名
- 天候：晴れ 気温：最高13.3℃ 最低4.9℃ 湿度：65%
- 救護活動内容：学生50名（大学院生含）、教職員8名、卒業生1名が参加し救護にあたった
 - ・BLS隊（1隊2名）：コース上に16隊のBLS隊を配置し、各活動範囲内の監視、および傷病者発生時における応急処置、記録等を行った。
 - ・モバイルAED隊（救急救命士1名、学生1名）：AEDやバイタル資器材を持って自転車に乗り、コース上を巡回。BLS隊と協力し、傷病者の救護にあたる。
 - ・N-DMAT：日体大独自の救急車が最後尾から追走しコースを巡回。重症傷病者発生時に応急処置や救護所までの搬送を担う。



マラソン大会でのスポーツ救急の可能性



鈴木 日体大救急医療

チームは、青葉区民マラソンに第1回から協力していますが、参加者の方々から好評をいただいています。大会後のアンケートでは、とても手厚いサポートがあるので安心して参加できたという声もありました。大会が行われた青葉区の消防との関係も良好で、「マラソン大会における救護対応システム」はすごくいいですとも言っていました。今後は救護対応システムについて消防からの助言をいただき、

よりよいものにと考えています。

小倉 私当日、救急車で最終ランナーの後方を走行していたのですが、治道で応援していた方からランナーでもない私たちに「お疲れさまです。頑張ってください」などとお声もかけていただきました。これは青葉区の住民の皆様が注目し、期待してくださっている証であり、スポーツ救急に対応した対応をしっかりと感じていただけたと理解しました。今後も参加している人だけではなく、治道で応援している人にも安心安全を感じていただければと思います。

た。

原田 私がかつて消防で仕事をしていた経験に照らしても、非常に質の高い準備と対策をしたと言えるでしょう。また消防と民間の大学がここまで連携できる例もなかなかないと思います。これはマラソン大会があるから連携したというのではなく、日頃からの密接な関係があつてからこそだと思います。それが地域の安心安全、そしてスポーツ救急の質を高めると考えられます。

小倉 第5回では救急車の稼働をはじめ、いくつか初めての試みもありました。そのなかで課題もあります。まず、市民マラソンなどでは参加するランナーの速度が大きく異なりますので、ランナーの列は長くなる傾向がみられます。動きにあわせて帯同するモバイルAED隊などがランナーの波にあわせて移動したことにより空白エリアができてしまいました。今後はそれをどのようにカバーするかが課題の一つです。

鈴木 今回救護本部を日体大が担当したのですが、通常のテントはただ屋根があるだけのものです。スポーツ救急の面で考えると完全なものではありません。日差しは遮ることができませんが、吹きさらしで冬は寒く、夏は多少の陰にはなりますが、テントの下は温度が高いままです。そこで今後、空調が使えるテントの導入を予定して



Q1

マラソン大会にランナーとして参加する場合、留意すべきことはどんなことでしょうか。また、もし、走っているときに緊急事態に遭遇したら、どうすればよいのでしょうか。

A1

まず自分の体調を冷静に判断して無理をしないことが非常に重要です。マラソン大会に出られるからと無理をする人が実は多いのです。そしてもし緊急事態に遭遇したら、呼吸があるか、意識があるかの確認を行い、自分と倒れた人の安全を確保しましょう。そして救護スタッフなどに連絡し判断を仰ぎます。自分は走り続けたという気持ちは理解できますが、その現場にいた人は情報をたくさん持っているのです。できたらその場に留まって、どんな状況だったのかなどの情報を救護スタッフ等にできるだけ多く伝えていただければとても助かります。





います。特にマラソンなどで緊急を要する場合に通常のテントでは初期対応がいくらか完全でも、寒かったり暑かったりする場所に体調の悪い人を留めおくのはリスクがあります。救護本部に空調完備のテントを置くこともスポーツ救急の課題の一つです。

小倉 今回はテントを設営し固定式の本部としましたが、今後は搬送機能だけではなく、救護本部機能も併せ持った車両の導入ができればとも考えています。例えばフルマラソンのような長距離にまたがる競技の場合、緊急事態が遠方で発生したとしても、そこに救護本部ごと移動して対応することができ、適切な処置ができると考えられます。また、オリンピックやパラリンピックなど会場が複数のにわたる大会などでも、移動可能な救護本部なら複数の会場もカバーできます。移動式の救護本部はこのような広域で行われる大会などにも対応できます。

鈴木 スポーツの現場では小さきままですが、救護が必要ながよく起こります。緊急性の順でいえば、心肺停止、次に季節によりますが熱中症、そして低体温症です。また転倒などによるケガもあります。心肺停止はすぐに心肺蘇生法など対処する必要もあります。また、マラソンでの転倒は一人だけではなく、周囲の人を巻き込んで大きな事故につながる可能性があります。そのほか、脚がつることもよく起こりがちですが、これは水分が足りないといえます。スポーツ救急ではこれらのことを予測して準備しておくことが重要なのです。

小倉 救護チームだけでなく、大会関係者はもちろん、ボランティアの方々も適切で素早い対応ができ、そのうえで専門家も駆けつけるというのがスポーツ救急の理想です。

鈴木 日体大は大学という研究教育機関です。今回実施した「マラソン大会における救護対応システム」は、緊急事態が起きたときに素早く対応できるシステムです。このシステムをさらにブラッシュアップし、よりよいものにしていくのが日体大としての大きな役割の一つです。そして、このシステムを多くの人が利用できる汎用性のあるものになければなりません。スポーツ救急を一部の専門家だけのものにせず、しくみとして広げていくことが重要だと考えています。そしてスポーツの場で突然死する人を一人でも減らすことが私たちの使命なのです。



Q2

小学校や中学校の教員などとしてマラソン大会を運営する側になった際、どんな準備をして、どんなことに対して注意すべきでしょうか。

A2

AEDの準備をするのは絶対必要です。もちろんしっかり使えることは大前提です。そして、緊急対応マニュアルも準備しましょう。そうすることで、緊急事態が起きてもマニュアルに従うことで誰もが適切に対応できます。そして、もし緊急事態が起きたら、対応をしっかりと記録しておくことも重要です。また自分が担任などを持った場合、個々の生徒の様子や体力などもしっかり把握しておくことと事故を未然に防ぐことができます。

第5回青葉区民マラソン
救護マニュアル



人と同じ道は歩まない。プロを目指してドイツへサッカー留学。 いまは地域のために、子どもたちのために全力を傾ける。

プロサッカー選手に憧れる人は多いだろう。もちろんその道は険しく、夢を実現できる人はひと握りだ。しかし、挑戦し続けることでさまざまな道が見えてくると伊藤さんは話す。サッカーが好き。プロになりたい。自分の夢にまっすぐに、信念を曲げずに挑みながらも、さまざまな経験や出会いを通して、自らの道を模索し続けてきた。そしていま、静岡県浜松市で、スポーツを通して地域と子どもたちに夢を与える活動に取り組む。ドイツで実感したような地域に根差したすそ野の広いスポーツ活動が理想だ。

サッカーが切り拓いてくれた これまでの私の道のり

NPO法人SV Norderstadtを設立して2年になります。Norderstadt（ノルダーシュタット）とはドイツ語で「北の街」の意味。活動の拠点である浜松市北区を盛り上げたいという思いを込めて名付けました。まず、NPOを立ち上げるまでに私が歩んできた道のりからお話ししましょう。

日体大卒業後、プロを目指してドイツへ1年半サッカー留学し、現地で3チームほどに在籍しました。大学4年の夏に声をかけてくれた人がいて、チャンスを与えてくれたのです。サッカーでお金を稼げるようになることが夢でしたので、サッカーに集中できる環境を求めて留学を決意しました。人と同じ道は歩みたくないという思いもありました。得たことは多々ありますが、なにより印象に残ったのは地域との一体感です。日曜日はお店も休みになって、みんなでサッカー観戦に行きます。「さすが」と驚き、日本との違いを実感しました。

そして帰国後、カマタマーレ讃岐に半年ほど在籍しました。納得のいくまでプレーがしたかったし、自分がサッカーをやっている姿を親にも見せたいという思いもありました。結局、公式戦には出場できませんでしたが、練習を重ね、最後のリーグ戦でベンチ入りを果たします。それが嬉しく、監督も「出してあげられなくてごめんね」と言ってくれたことで、そこで自分のなかで現役生活に踏ん切りがついたように思います。



活躍する

OB

NPO法人 SV Norderstadt 理事長

伊藤 佑介 氏

INTERVIEW



そんなとき、知人から紹介され、定時制高校の非常勤講師となり、さらに特別支援学校に常勤教員として勤務するようになります。次第に障がいがある子どもたちの変化に気付けるようになってやりがいを感じ始めました。部活動でもサッカーを教えており、卒業後にもサッカーを楽しむ環境をつくりたいと考え、いまのNPO設立に至ったのです。

現在は、一般の小学生と知的障がいがある子どもたちを対象としたサッカー指導と、社会人チームによる活動を行っています。知的障がいの者のフットサルで日本代表の子どもがいる一方で、運動機能に困難を抱える子どももいますが、「こういうパスを出したら、この子でも受け止められるのではないか」と子どもたち同士でコミュニケーションが生まれている様子を見ていると非常にやりがいを感じます。先日の大会でも、うちのチームが際立って盛り上がりつつ、「みんな一緒に」なるって、すごくいいな」と目を細めて眺めていました。

今後はサッカーに限らず、いろいろな競技を総合的に楽しめる環境をつくっていくことが目標です。さらに、健常者と障がい者が一緒にプレーしたり、地域とかわりながら、スポーツや障がいに対する理解を広めていきたいと考えています。

自分のスタイルを守りつつ 柔軟に吸収する

サッカーを始めたのは3歳のとき。ずっとプロを目指してきたことはこれまでお話ししてきた通りです。ジュビロ磐田のユースに在籍し、はじめは大学に進学する気持ちはありませんでしたが、鈴木政一氏（日体大OB。ジュビロ磐田、日体大等の監督を歴任）をはじめお世話になっていた方々から「大学に行つて結果を出してからでも遅くない」とアドバイスいただき、日体大に入学しました。

4年間の部活動と寮生活で、クラブチーム出身ということでプレッシャーを感じることもありました。いま振り返ると、プレーはもちろんですが、ピッチ以外でも、あいさつや人とかかわり方など、学んだことが多々あったと思っています。

ある意味では個性の強い部員でした（笑）。夜、誰もいないグラウンドに出て、録音した試合の歓声をiPodで聴きながら、ボールも使わず、一人でフリーランニングしたこともあります。ときには、ゴールを決めたときのポーズも。少し気恥ずかしいですが、世界の舞台を純粋に夢見ていました。

就職課程にも取り組みましたが、そのほか大学の授業でさまざまな競技の指導法を学んだことは、いま思うと役立っています。自分が楽しかつ



ます。自分が楽しかつ

伊藤 佑介（いとう ゆうすけ）／体育学部体育学科、2011年卒。静岡県立磐田北高校出身。ジュビロ磐田ユースを経て、日体大入学。ドイツ留学後、カマタマーレ讃岐（香川県）に所属。2016年5月にNPO法人SV Norderstadtを立ち上げ、静岡県浜松市を拠点に、障がい者スポーツの環境整備、サッカーの普及を中心に活動を行っている。現役引退後、特別支援学校に教員として3年間勤務し、知的障がいや肢体不自由、重度や重複した障がいがある子どもたちと接した経験からNPOを設立した。また、社会人チームSVノルダーシュタットの監督兼選手として静岡県社会人1部リーグを目指す。



た経験がありますから、現在の活動でも、卓球やバレーボールやバスケットボールなど、サッカー以外の競技もある程度のは子どもたちに教えることができます。このように、サッカーに導かれながら、日体大や海外でさまざまな経験を、チャンスを活かしながら物事を吸収してきました。決して平坦な道ではありませんでしたが、すべてがいまにつながっていると、あらためて思います。

好きなことを一途に

NPOの運営は、自分一人の力ではできません。特別支援学校で知り合った先生方や保護者の方、地元の方など多くの方に協力いただいています。そこでは「伝える力」「話を聞く力」が大切です。日体大では、いろいろな競技の選手や、サッカー部内でも各地方から集まる選手たちと出会うことができました。異なる考え方を持つ人たちと、ときには熱く議論することもありました。本音で交流することで、よいアイデアや信頼関係が得られるのではないかと思います。本当に大学4年間の経験は貴重です。

せっかく大切な時間を過ごしているのですから、なにか得よう、吸収しようと言う気持ちで積極的な物事に臨んでほしいと思います。まずは好きなことに徹底的に取り組み、極めてほしいです。そうするうちにいろいろな選択肢が見つかるようになります。結果は別にして、リーグを目指す過程で、スクールにかかわったり、企業の人と知り合ったりして、そのチャンスを活かして道が開かれていくのです。その軸とするためにも自分が「好きなこと」を大切にしてください。

日体大も地域連携の活動や、バラスリートの育成に力を入れています。私たちの活動と重なるもので、多様な人々・競技が一つに集まってスポーツが楽しめる環境は理想です。スポーツを愛する皆さんが幅広い舞台上で活躍されることを期待しています。

ラウンジの顔。ホテルの仕事を極め、2020年、海外からのお客様に最高のおもてなしを提供したい。

昨年、訪日外国人旅行者数が初めて3,000万人を突破した。東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には4,000万人の受け入れを目標に取り組みが進んでいるという。外資系ホテルのトップブランドの一つであるヒルトン東京で活躍する中村さん。在学中から一貫してホテル業界への就職を希望し、部活動と就職活動を両立してきた。さらに、2020年に向けて世界のお客様を迎える立場で仕事をしたいと、外資系ホテルにステップアップした。ラウンジに立つその笑顔からお客様の1日が始まる。

私らしく働けるのが
ホテルだと思った

日体大ソフトボール部女子で日本一を目指す一方で、入学したときから、絶対にホテルに就職したいと思っていました。人と接することが好き。人と関わる仕事がしたい。接客を学ぼうと、忙しい部活動の傍ら、ファミリーレストランでアルバイトを経験したほどうす。ホテルは、女性らしく、そして最も私らしく働ける仕事だと思っています。

日体大卒業後、日本全国に展開するビジネスホテルでホテル業界のキャリアをスタートし、ヒルトン東京に転職して4年目になります。キャリアアップを目指したのは、やはり2020年の歴史的な瞬間に、世界的に有名なブランドのホテルで海外からのお客様をお迎えしたいと考えたからです。

現在はヒルトン東京の顔とも言えるロビーラウンジ「マーブルラウンジ」でレセプション業務を担当しています。ラウンジを訪れるお客様を最初にお迎えしたり、会計をさせていただきお客様をお見送ったりするホテルの印象を左右する重要な仕事です。勤務時間帯はおもに朝食からランチ、デザートビュッフェまで。マーブルラウンジはビュッフェスタイルで、早朝から深夜まで、ご旅行やビジネスのお客様、ご家族やご友人とのご飲食など、たくさんのお客様にご利用いただいています。朝食であれば私がその日最初にお客様に接するホテルスタッフになります。ディナーを含めれば、1日のお客様が1,000〜1,500人になることも。そ



活躍する

OG

ヒルトン東京
マーブルラウンジ レセプション

中村 恵氏

INTERVIEW



んななかで、お客様が私のことを覚えていてくださって名前を呼んでいただいたときは、とても嬉しく思います。

宿泊のお客様はほぼ9割は外国人の方なので、はじめのうちはコミュニケーションに苦労しました。しかし、ヒルトン東京では語学を勉強するカリキュラムが用意されており、さらに学んだことをすぐに現場で実践できるため、非常に恵まれた環境でスキルアップできるとありがたく思っています。

2020年には、ヒルトン東京でも宿泊やパーティーで多くの海外の選手や関係者をお迎えすることになると思います。私自身もスポーツに携わっていましたから、そのような方々に直接サービスを提供できることがいまからものすごく楽しみです。それまでにはさらにキャリアを積んでいることになりましたから、私なりの提案ができたと思っています。憧れだったホテル業界で、オリンピック・パラリンピックに携わっていると実感できることが、なによりうれしいです。

人とかかわる経験が ホテルの仕事でも自信に

高校時代もソフトボールに打ち込んでいました。日体大に入学したのも、ソフトボールを続けて、日本一になりたいという思いがあったからです。地方出身でもあり、3年生まで寮生活を続けていました。ほとんど寮とグラウンドを往復する毎日だったと記憶しています。

そんななかで、同期の存在がなにより心強かったと思います。夜、屋上でミーティングと称して語り合ったことが思い出です。実は、最初に就職したホテルは全国転勤があつて、関東圏の同期たちと身近に会いたいと思つたことも転職を決めた理由の一つでした。そのほか当時の部活動で印象的だったのは、一人行動をしないルールでしょうか。1年生のときはトイレに行くときも必ず2人以上が原則。それなりに守つていましたけど…(笑)。いまでも同期たちと会うと、そんな思い出話に花が咲きます。

教育実習やスケート実習など、学外での活動も楽しめました。教育実習は、ふだんの授業や練習とはまったく異なる環境です。教壇に立ち、教える側の気持ちを理解することができて、経験してよかったと思つています。また、スケート実習は、未経験のウインタースポーツに挑戦できて、楽しい時間を過ごすことができました。

部活動では、副キャプテンとして、監督と選手たち



中村 恵(なかむら めぐみ)／体育学部体育学科、2014年卒。星城高等学校(愛知県)出身。ソフトボール強豪校の同校から日体大に進学。いまはフルマラソンに挑戦中。走ることが好きで、無心になれる時間が魅力という。昨年は、横浜マラソンに出場。ホテルは時間的にも働きやすく、充実したオフも過ごしている。ホテルの仕事はお客様に特別な時間を提供すること。前任のホテルではフロントを、現在は料飲部門を担当し、キャリアの幅を着実に広げている。東京・新宿のヒルトン東京「マーブルラウンジ」のデザートビュッフェは都内ホテルラウンジの中で最も予約が取りづらいほどの好評とか。



の橋渡し役を務めました。もう少し徹底してコミュニケーションをとればよかったと少し心残があります。しかし、日体大では、先生や監督、先輩方とお話しする機会が多くあり、それがいまの仕事でも自信になっています。この経験のおかげで、人前に出ることに抵抗がなくなり、緊張もなくなりました。VIPのお客様が多く訪れるヒルトン東京では、ふつうではお目にかかれないような方々に接することが珍しくありません。そのようなときも、いつも通り、平常心でサービスに努めています。

動き始めれば見えてくる

同期から「あなたが頑張っていたから、私たちも就職活動を真剣に考えるようになった」と言われたことがあります。繰り返しますが、私はホテルの仕事に憧れて、その思いはブレずに持ち続けてきました。将来について、皆さんが不安に思うのは当然だと思います。でも、決して恐れる必要はないし、始めてみればどんなかわかることがあります。日体大は就職サポートも充実しているので、積極的に活用して、行動してほしいと思います。

日体大生は好感をもつて受け入れられることは間違いないありません。礼儀正しく、あいさつができる。第一印象は大切です。打ち解けやすいので、わからないことも率直に尋ねて、教えていただくことができます。そのような人とかかわり方も、部活動を通して学ぶことができるはずです。

私も含めて、2020年に向けて、それ以降も、日体大の勢いを社会に広めていきたいと思います。教員や公務員を目指す学生が多いと思いますが、一般企業・社会で活躍されている日体大のOB・OGもたくさんいらっしゃいます。日体大の元氣やパワーをもっといろいろな場で発揮していければ、社会的にも盛り上がりつつ、未来が楽しくなるのではないかと思います。スポーツ界やビジネス界で活躍する皆さんと実社会でお目にかかることを楽しみにしています。



Next is us

日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

07

大竹風美子

ラグビー

才能を見出されて始めたラグビー。

試行錯誤の日々だが、やるべきことはわかっている。

それは東京オリンピックで頂点を目指すこと。

そして、自分も輝くこと。

ラグビーを始めたきっかけ

ラグビーをやりたいと思ったきっかけは、リオ五輪のラグビーを見たことです。私は子どもの頃から陸上をずっと続けており、高校のときに転向した7種ではインターハイに入賞もできました。目標とした5000点を超えることもでき、満足感がありました。同時にやり切ってしまったという虚無感があったのも事実です。そんな思いをしていた8月上旬のことでした。テレビをつけると、リオ五輪が放映されていて、ラグビー日本代表選手がキラキラして見えたのです。私もあのように輝きたいとラグビーをやることを決めました。私とラグビーとは、少なからぬ縁がありました。私が在学していた東京高校はラグビーが盛んで、少し前から誘われており、日体大ラグビー部の練習も見学したことがあったのです。また、バスケットボールの授業で、ボールを持って走り出したことがあり、その後先生に呼び出されて、ラグビーをやってみないかと言われていたこともありましたが、なんとなくラグビーを意識はしていませんでしたが、私は陸上と決めていたので、始めはラグビーをしようという気持ちにはならなかったのです。でも、リオ五輪のあの日から私にはラグビーしかないと思うようになりました。11月には日本ラグビーフットボール協会のユースアカデミーの合宿に参加することになりました。

日体大へ進学を決めた理由

日体大へはラグビー部の練習を見学していたり、誘われていたこともあって、ラグビーをやるなら日体大以外は考えられませんでした。ラグビーをやると決めてすぐに、日体大への推薦の手続きをとり、入学を決めました。女子のラグビー部がある大学が

少ないことありますが、他の選択肢は考えられませんでした。入学して、この選択は間違いないかと確信しています。身近にトップアスリートがいて常に刺激を受け、そんな人たちを見てみると、私も負けていけないと強く思います。実は「Next is us」に登場した池愛里(53号)さん、木村円さん、河本結さん(51号)の各選手とはとても仲がよく、今度、私も取材を受けること話したところです。競技は違っても、東京大会に出る、出て頂点を目指すという同じ目標があるのはモチベーションが上がり、恵まれた環境だと思っています。それぞれの大会が近いときは、大会への思いなどを話し合うこともでき、やる気が全開になります。とにかく何もかも、ためになることばかりです。

日本代表に選ばれて

私が初めて日本代表に選ばれたのは日体大に入学する前でした。当時はラグビーを始めてまだあまり間がなく、実感がわかなかったというのが事実です。日本代表がどういう意味をもつか理解する間もなく、日々やるべきことといっぱい、いっぱいでした。今、冷静に考えてみるとその重責をあらためて感じます。だからこそ、日本代表という責任と期待をしつかり理解し、一つひとつのプレーや行動を実践していきたいと考えています。東京大会はもう2年を切っており、メンバーのカラーもわかっています。私はフォワードとウイングで、ラインプレーカーという前に推進したり、1対1で走り負けない役割で、今の目標はこの役割の精度の高さ、強さを追求することです。

まず、ラグビーをもっと知ること

ラグビーのプレーに関していうと、私は



体格が恵まれていることもあるので、キックオフ時にマイボールにすることはいわゆる球際に強いくこと、とにかく当たり負けないようにすることです。グラウンドを離れば、映像を見たり、本を読んだりして知識や情報を増やすことに努めています。私は他の選手より経験が浅いので少しでも追いつきたいと思っているからです。さらに今のラグビーは頭脳戦なので、情報や知識があれば相手に勝つことができます。ラグビーをもっと知ることに入れています。

東京大会では絶対メダルを獲得したい

2020年東京大会ではメダルを獲得してみんなで笑顔で表彰台に立ちたいです。ただ、メダルを獲得するとひとりで言っても簡単なことではないのは十分理解しています。だからこそ、今、厳しい練習をしています。代表の合宿は1年間で2000日以上あり、非常に過酷です。でも、その苦しい時間があるからこそ、メダルへの意欲も高くなると信じています。辛い思いもいっぱいありますが、メダルを獲得してその苦しい思いを、楽しかった思い出にできればと考えています。結果次第で辛いことも、楽しかった思い出に変わるはず。だからこそ、絶対メダルを獲得したいです。

桜のジャージを誇りに、
輝くために前へ、前へ進む。

[Next is us 日体魂の聖火リレー]

◆山口選手からの質問に答えて

「私は試合前に、自分の調子のいいときの動きなどのイメージトレーニングをしています。試合前にどんなことを考えて試合に臨んでいますか」

とにかく、私は何も考えないようにしています。それは、これまでいろいろ試したり、分析したりして、考え過ぎないほうがうまくいくことがあったからです。「無」になるようにしています。強いていえば、空がきれいとか、気分が変わるようなことを考えています。

次号に登場するアスリートに向けて、大竹選手からエールをいただきました

◆大竹選手からのエール

東京オリンピックでは、代表に選ばれて出場したら「ONE for ALL, ALL for ONE (一人はみんなのために、みんなは一つの目的のために)」の精神で金メダルを目指して全力で臨みます。ともにオリンピックの選手団になったら頂点という一つの目的に向けて頑張しましょう。

次号アスリートへ、リレー質問を展開していきます。ご期待ください。

◆プロフィール

大竹風美子(おおたけ ふみこ)
体育学部2年 ラグビー部女子所属。東京高校出身。高校まで陸上競技に専念。高校3年のとき、インターハイ7種競技で6位入賞。ラグビーに転向後、2017年にサクラセブンズ(女子7人制ラグビー女子日本代表)に初選出。リオ五輪でのラグビー女子日本代表の姿に憧れを抱いたこともラグビーを始めたきっかけだったという。

教職支援センター

Report ⑤

日体教学舎は、教員を強く希望する在学生（2～3学年）と卒業生を対象として開設されている特別教員養成講座です。授業内成績、小論文、集団面接等により選抜された学生と学内専任教員、管理職等を経験された学外講師で構成されています。主な活動は、実際の教育現場を想定し、いじめや不登校を始め、体罰等にどう向き合っていくかをグループワークや全体発表を通じて考え、教員として求められている資質や実践力を身に付けていく活動です。

発表会を通して、教員の資質やプレゼンテーション力の向上に努めています。



学生学舎長 **長澤 裕斗**（ながさわ ゆうと）
体育学部 体育学科3年
山梨県立甲府昭和高等学校出身

日体教学舎に所属していた先輩の話を聞き、学校現場に立ったときに必要となる資質や能力を最重要視していたことや、様々な活動で教育について深く考える機会が得られると思い、所属を決めました。二年間の活動の中で、教員に必要な姿勢、資質を身に付けられたことはもちろん、発表機会の多い活動を通してプレゼンテーション力、コミュニケーション能力、他者の考えを尊重しつつ相手が求めていることを読み取る力等々、様々な能力を身に付け伸ばすことができました。また、ともに勉強する大切な仲間たちを作ることができたと思います。最も印象に残っているのは、昨年度の日体教学舎発表会です。学長や教育委員会の方々を前に発表する機会をいただきました。そこで、教育に関する考えやプレゼンテーション力の未熟さを痛感しました。そこから一年間学生学舎長として取り組み、一月末に行われた発表会で今年度一年間の成果を示すことができました。

●ひとこと：日体大へは小学校から毎日水泳に打ち込んでいく中で、北島康介選手に憧れ、志望していました。山梨県の高等学校、保健体育科教員を志望しています。スポーツを通して、多くの生徒の成長と共にキャリア教育に力を尽くすことで恩返しをしたい思いがあります。

緊張感あふれる模擬保護者対応など貴重な体験が豊富です。



学生副学舎長 **中村 凌太**（なかむら りょうた）
体育学部 体育学科3年
長野県松本県ヶ丘高等学校出身

学内ポータルシステムのn-passで募集を知り、「これに入れば、多くのことが学べ、合格に近づけるのではないかと」考え所属を希望しました。ただ単に教員採用試験の勉強だけを目的とするのではなく、現場に入ってから、生かせる知識や技能を学び、それを実践できる場として、非常に有効と考えたのです。教学舎の魅力は、実際に教員になってから、どう具体的に考え、判断し行動していくか、実践に近い取り組みを行っていることです。現場経験をお持ちの先生方からお話を聞きながら、多くの問題に対して考える機会が豊富にありました。中でも、一番印象に残っているのは、保護者対応です。保護者役の職員の方々に参加していただき、実際の状況を想定しながら行いました。言葉遣いや発言の内容を緊張感のある中で話したため、多くの貴重な経験を得ることができました。さらに違う学部、学科の仲間もでき、ともに成長することができました。

●ひとこと：長野県の高等学校が志望先です。学生生活はあっという間なので、いろいろなことにチャレンジしてほしいと思っています。海外に行く、英会話をする、ボランティア活動をするなど多くのことに全力で取り組んでいきましょう。失敗を恐れずに挑戦していつもらいたいと考えています。

仲間や経験豊富な先生方との素晴らしい出会いがあります。



学生副学舎長 **高階 成美**（たかしな なるみ）
体育学部 健康学科3年
神奈川県鎌倉女子大学高等部出身

2年生の頃に受けた体育科教育法の授業の中で先生が紹介してくださったことで教学舎を知りました。所属したきっかけは、教員を強く志す仲間と共に高め合える環境に身を置き、自身を磨いていきたいと思ったためです。また、多くの経験を積み重ねた先生方のもとで学べることに魅力を感じ、ここでなら自分を高めることができると感じました。「教員を強く志し、共に学び合える仲間との出会い」、「管理職経験がある等、偉大なる先生方のもとでの学び」これらは教学舎でしか経験できないことであり、所属していることを誇りに思います。教員になるために必要な勉強だけでなく、教員になってから即戦力として現場で活躍することを目指して活動しているため、より自覚も高まりました。模擬保護者対応は、学校側の望ましい対応等を様々な角度から考えることにより物事を多角的・多面的に捉える機会になりました。

●ひとこと：中学校・高等学校（保健体育）教諭免許と同時に養護教諭免許の取得を目指しています。子どもの命を一番に考え、守ることは、教員として当然のことです。教員になった際、生徒の心身の些細な変化にも気づき、柔軟かつ即座に対応するために、生徒理解や日ごろの研修等に励むよう努めます。

教員を志す者が集い、 切磋琢磨する「日体教学舎」

教学舎とは

本年度対象：体育学部、スポーツ文化学部、児童スポーツ教育学部 2年生、3年生のうち小学校教諭・中高保健体育科教諭・養護教諭・特別支援学校教諭を強く希望する者。本学教職員又は本学を卒業した国公私立学校の管理職・教諭及びその経験者からの推薦による卒業生を対象としています。（※来年度、スポーツマネジメント学部も対象予定。）

設置目的：小学校教諭、中・高等学校保健体育科教諭、養護教諭、特別支援学校教諭を目指す者が集い、互いに切磋琢磨し、学び合う場として、また、教諭を目指している学生の良き模範者（リーダー）になるとともに、実践的指導力を養成する場として設置しています。

概要：学内教員をはじめ学校管理職や教育行政を経験した方々を講師に迎え年間26回の特別講座や演習等を行い、毎年1月に本学学生や近隣の教育委員会、学校関係者、本学OB・OG等を対象に発表会を実施しています。

その内容は、体育実技指導に関する提案及び保健等の模擬授業を1年間の取り組みの成果として発表しています。



いじめ・不登校への対応

教育課題の中で最重要視され、多くの課題を抱えるいじめ・不登校への対応では、過去の事例を参考にグループワーク・全体発表を行いました。自分の受け持つクラス、学年、部活動等でのいじめ・不登校が起こってしまった場合にはどのような対応が必要なのか。直接的に行われるいじめとSNS等によるネットいじめでの対応の違いはどうすればいいのか。どのような連携が必要なのか。現場経験の豊富な講師の方々とより対話的で個別指導に近い形で活動を行うことで考えや知識を深めることが出来ました。

保護者対応への対応と疑似体験

保護者対応では、外部及び学内の職員で実際にお子さんのいらっしゃる保護者の方々をお招きし、過去の事例を踏まえたロールプレイングの活動を行いました。様々な教育課題が存在する現場での保護者への対応は必ず起こりうることです。活動を通して学内・外部機関との連携、また保護者との連携の必要性を学ぶことが出来ました。さらに、保護者一人ひとりにあった適切な対応の重要性和難しさを感じる事が出来ました。

模擬授業の発表

今年度は、学習指導要領の改訂が小学校等で先行実施されていることを踏まえ、現在の学校現場での状況を踏まえた模擬授業を行って来ました。グループワークを通して、通常学級に発達障害がある生徒が在籍していることを想定した支援、授業を円滑に進行し、個々のレベルに合わせた指導を行うチームティーチングの導入、生徒に模擬体験等の活動を通して、考える力を身に付けられる工夫等をそれぞれのグループで行って来ました。そして、1月末に実施された「日体教学舎発表会」では、講座内で行われた選考により選抜された3班が各20分の模擬授業を行いました。

平成30年度 日体教学舎 活動実績

実施日	告知・選考
4月13日～24日	学生へ説明会開催の周知
4月24日	学生への説明会の実施
4月24日～27日	応募受付
5月8日	選考開始
5月16日	選考結果公表
実施日	活動内容
1 5月22日	開学舎式、先輩からのメッセージ、オリエンテーション、教員採用の勉強法等
2 5月29日	校種別グループ（4人～5人）による言語活動を主とした交流（自己紹介、目指す教師像他）
3 6月5日	講演「教師を目指す学生に望むこと」、グループごとに講演内容のまとめ
4 6月12日	「いじめ問題」に関する理解と取り組み（講義・課題別グループ協議）
5 6月19日	「いじめ問題」に関する理解と取り組み（課題別グループ協議）
6 6月26日	「いじめ問題」に関する理解と取り組み（課題別グループによる発表）
7 7月3日	「不登校」に関する理解と対応（課題別グループ協議）
8 7月17日	「不登校」に関する理解と対応（課題別グループによる発表）
9 7月24日	「体罰」に関する課題への対応（課題別グループによる協議）
10 7月31日	「体罰」に関する課題への対応（課題別グループによる協議・発表）
9月15～17日	＜教員採用二次対策合宿＞
11 10月2日	「保護者対応」に関する理解と課題解決に向けた取り組み（課題別グループ協議）
12 10月9日	「保護者対応」に関する理解と課題解決に向けた取り組み（課題別グループ協議）
13 10月16日	「保護者対応」に関する理解と課題解決に向けた取り組み（課題別グループ発表）
14 10月23日	多様な教育課題に対する理論と実践（校種別・発表）
15 10月30日	体育・保健体育科模擬授業の実施1（体育又は保健の単元の選択、指導内容の協議）
16 11月6日	体育・保健体育科模擬授業の実施2（指導内容の協議）
17 11月13日	体育・保健体育科模擬授業の実施3（単位時間の指導計画等の作成・協議）
18 11月20日	体育・保健体育科模擬授業の実施4（単位時間の指導計画等の作成・協議）
19 11月27日	体育・保健体育科模擬授業の実施5（全体発表）
20 12月4日	体育・保健体育科模擬授業の実施6（全体発表）
21 12月11日	発表会準備
22 12月18日	発表会リハーサル
23 1月9日	発表会リハーサル
24 1月15日	発表会リハーサル
25 1月21日	発表会リハーサル
26 1月22日	発表会（公開模擬授業：世田谷キャンパス記念講堂）・閉学舎



平成30年度 第4回留学生交流会(日体ファミリー)を開催しました



平成30年12月7日(金)、日本体育大学、日体大荏原高等学校、日体大柏高等学校、日体大桜華高等学校に在籍する35名の留学生交流会が東京・世田谷キャンパスにおいて開催されました。笠井副学長から挨拶があり、荒木国際交流センター長による身体を動かしながらの自己紹介、日本語のゲームで交流を深めました。日本語を使ったゲームでは、ことば当てクイズやひらがなビンゴを行いました。参加した留学生は楽しそうにチーム全員でゲームに取り組んでいました。今後も日体ファミリーの留学生同士がコミュニケーションを取る機会をつくり、留学生がより良い学校生活を送れるようサポートします。

「日本体育大学クリニック開院式」が執り行われました

平成30年12月3日(月)、東京・世田谷キャンパスにて「日本体育大学クリニック開院式」が執り行われ、松浪理事長、今村常務理事、具志堅学長、平沼院長によるテープカットや内覧会が実施されました。本学の東京・世田谷キャンパス教育研究棟1街区G階に、クリニックの誕生です。日本体育大学クリニックは、最新の機器を使用し怪我や病気の診断、治療を行います(スポーツに起因しないケガや病気も受診できます)。スポーツ選手が受診するメリットとしては、怪我の予防等、スポーツを行なううえでのアドバイスを受けることができます。また処方される薬はドーピングの心配がいりません。将来は、スポーツ選手の外傷、障害データを蓄積し分析していくことで、外傷、障害の原因(危険因子)を発見し怪我の予防につなげていきたいと考えています。地域住民の方々をはじめ、もちろん本学学生や教職員もぜひご利用ください。診療科は整形外科、内科、外科です。式典終了後には、早速保険診療を開始しました。



北京体育大学建学65周年式典に副学長が出席いたしました

平成30年10月20日(土)、交流協定校である北京体育大学建学65周年式典が執り行われ、本学からは松井副学長が出席しました。式典中には学長フォーラムが行われ、北京体育大学が交流協定を締結している各国の大学の学長・副学長が各々のテーマでスピーチをしました。

松井副学長は「日本体育大学の国際的活動—高度な国際競技力と指導力で世界の架け橋に—」というテーマで、36年に渡る北京体育大学と本学の交流、本学の国際的活動についてスピーチを行いました。

本学とも交流協定を締結している国立体育大学(台湾)や上海体育学院の学長も出席され、お互いの大学について共有する良い機会となりました。今後も両学のより良い交流ができるよう、努めて参ります。



インドネシア2018アジアパラ競技大会に本学関係者が参加

平成30年10月6日～10月13日にインドネシアのジャカルタ、パレンバンにてインドネシア2018アジアパラ競技大会が開催されました。日本代表選手団は、選手304名(男子182名、女子122名)、団体役員・コーチ等149名、競技パートナー12名、本部役員21名の合計486名で、本学関係者からはコーチ3名、競技パートナー1名、選手9名(男子6名、女子3名)、計13名が参加しました。

成績一覧(敬称略)

競技	学年	氏名	成績
陸上競技	大学院2年	重本 沙絵	女子100m 3位
			女子400m 3位
	学部2年	鈴木 雄大	男子100m 13位
			男子走り幅跳び 5位
バドミントン	学部2年	兎澤 朋美	女子100m 3位
	学部2年	今井 大湧	女子走り幅跳び 3位
水泳	学部2年	池 愛里	男子シングルス・団体 ベスト8
			女子100m自由形 2位
			女子400m自由形 3位
			女子100m/バタフライ 1位
			女子200m個人メドレー 2位
	学部1年	窪田 幸太	女子4×100m自由形リレー 2位
			女子4×100mメドレーリレー 2位
			男子100m平泳ぎ 10位
			男子4×100m自由形リレー 1位
			男子4×100mメドレーリレー 2位
	大学院2年	富田 宇宙	男子50m自由形 3位
			男子100m背泳ぎ 2位
			男子100m/バタフライ 4位
			男子50m自由形 2位
			男子100m自由形 1位
	大学院2年	富田 宇宙	男子400m自由形 4位
			男子100m/バタフライ 7位
			男子200m個人メドレー 2位
			混合4×100m自由形リレー 1位

成績一覧(敬称略)

競技	学年	氏名	成績
卓球	大学院2年	宿野部 拓海	男子団体 3位
車いすバスケットボール	学部2年	鳥海 連志	男子 2位

出場者リスト(敬称略)

競技	区分	所属区分	氏名
陸上競技	コーチ	スポーツ専門職	水野 洋子
	選手	大学院2年	重本 沙絵
	選手	学部2年	鈴木 雄大
	選手	学部2年	兎澤 朋美
バドミントン	選手	学部2年	今井 大湧
柔道	コーチ	教員	樋口 毅史
	コーチ	非常勤講師	杉沼 春美
水泳	選手	学部2年	池 愛里
	選手	学部1年	窪田 幸太
	選手	大学院2年	富田 宇宙
	選手	大学院2年	宿野部 拓海
卓球	選手	学部2年	鳥海 連志
車いすバスケットボール	競技パートナー (パイロット)	卒業生	倉林 巧和